

## 留学生と住民と一緒に楽しむ滋野区民体育祭



(ホームページ「上京ふれあいネットカミング」平成27年12月25日掲載)

10月11日(日)、今年で60回を迎える滋野体育祭が秋空のもとで行われた。白線で書かれたトラックの周りにはずらっと16町内が陣地を構え、競技を観戦していた。その中でも特に目を引く陣地があった。勘兵衛町である。今回で2回目の参加となる勘兵衛町、その参加者の大部分は留学生宿舍「きょうと留学生オリエンテーションセンター」さつき寮の総勢40名の留学生等である。



### 【祖国にはない“地域の体育祭”】



自分の国では学校の体育祭はあるけど、滋野区民体育祭の様な“地域の体育祭”はないので、すごく新鮮だし面白い、という声が留学生から多く聞かれた。実際、留学生の様子を見てみると、地域の方に話かけてもらったり、子どもたちとお菓子を食べたりして、楽しそうに体育祭に参加していた。

その“地域の体育祭”ゆえ、留学生から見るとユニークな面がいくつもあるようだった。その中の一つが競技のユニークさ。滋野体育祭には特にユニークな競技が多い。例えば「樽ころがしリレー」

や「ムカデ競争」。競技に慣れていない留学生にとっては難しかったようで、手こずっていた。ムカデ競争に出場した留学生は「ムカデは難しかった。技術が必要な競技だと思った。バランスをとるのが難しかった。」と悔しがっていた。

大人が本気で競技に挑んでいるというのにも留学生の目にはいささか不思議に映ったようであった。過去に幼稚園の運動会に参加したことのある留学生は、「地域の運動会は幼稚園の運動会と違って大人が本気で頑張っているのが面白い。」と語っていた。

そのほかにも「漫画で読んだラジオ体操が本当に見られて楽しかった。日本人全員ができるのが驚いた。」と少し興奮気味に話してくれる留学生もいた。

「闘魂」と書かれた白いはちまきをして顔を白くしながら「アメ喰い競争」で全力疾走する者、子供とお菓子をつまみながらシートに座ってもの珍しげに競技を観戦する者、皆思い思いに“地域の体育祭”を楽しんでいたようであった。



### 【留学生宿舍「きょうと留学生オリエンテーションセンター」さつき寮】

さつき寮は滋野学区勘兵衛町にある。勘兵衛町は堀川通から東へ三筋目の小川通を挟む場所に位置している。北は出水通、南は下立売通に囲まれ、家々が軒をつらねる地域である。さつき寮は留学生に対して安価で良い住居を提供することに加え、留学生と地域との交流を通じて地域の国際化を図る取組を行っている。現在、世界各国からの留学生36名がさつき寮で生活をしている。

元第二日赤看護専門学校寮を改修してさつき寮が開設されたが、さつき寮ができるまでの道のりは決して平坦ではなかった。何度も話し合いが重ねられ一つ一つ課題をクリアしてきた。そして現在、地域の方々の理解と惜しみない協力があり、さつき寮は地域に受け入れられている。

### さつき寮オリエンターの大西さん

「最初は勘兵衛町に留学生寮ができると聞いたときは、地域の方は少し不安を持たれていたようだった。でも体育祭や町会の行事で留学生は子供とすぐに打ち解けるし、それを見ている大人

たちもどんどん留学生との壁を取り払っていく。体育祭に出て顔を覚えてもらえば「あっ、体育祭におった子や」ってわかる。やっぱり、直接会って一緒に動いてふれあうことがお互いを知る一番の方法であるし、誤解もなくなる。」

### 勸兵衛町の地域の方

「少子化が進んでいる中、留学生が大勢入ってくれて盛り上がる。最初は難しく競技ができないのではないかと心配していたが、実際はその場ですっと入れる。」

### 子どもたち

「さつき寮によく遊んでくれるにいちやんがいてよく遊びに行っている。楽しい。英語も習っているけど、にいちやんたちは日本語で話してくれる。さつき寮が好き。」

さつき寮には留学生のほかに、日本の文化や生活習慣に不慣れな留学生が早く日本の生活に慣れ、より充実した生活ができるようオリエンターがサポートするとともに、その補佐役としてレジデントアシスタントと呼ばれる日本人学生も住んでいる。寮の使い方の説明や、日本に住むのに必要な手続きのサポート、イベントの企画など留学生の生活をサポートしている。多くの留学生を相手するので大変ではないかと聞いたところ「そんなに大変ではない。大変なことより楽しい方が断然多い！」という力強い答えが返ってきた。滋野区民体育祭でも留学生がスムーズに競技に参加できるよう、留学生を引っ張っていた。留学生の声を府や地域の方に伝えるという重要な役割を担っているのが彼らレジデントアシスタントである。



世界各国から来た人たちが文化も習慣も違う京都に住んでいるので、どうしても不慣れな日本の生活の中で多少の問題は出てくる。それでも、さつき寮ができてから今日まで大きな問題がないのは、各方面でさつき寮の為に尽力している方たち、そして地域の方の惜しまない協力と支援があるからではないかと強く思った。

### 【取材を終えて】

今回取材させていただいた中で私が一番印象に残っているのは、地域の方々が留学生を暖かく迎え入れていたことです。40人分のスペースの確保やゼッケンが外れかけている留学生に大丈夫かと声をかけられていたり。さつき寮ができるまでの経緯をお聞きしていたのでなおさら地域の方々の寛容さ・優しさに驚き、感動してしまいました。

2014年には東京・大阪・博多の大都市に次ぐ約7000人の留学生が京都で生活を送りました。グローバル化そして2020年のオリンピックもあり、今までにないほど日本は世界から注目を浴びています。その中で、日本の文化の中心である京都に来る留学生が今後さらに増えるのは必至と言えます。そうなったときに私たちはどのように多文化共生社会を作っていくのか、このさつき寮の事例から学べることはたくさんあると取材を通して感じました。

### 〈レポーター紹介〉

長谷川萌恵

神奈川県出身。同志社大学経済学部4回生。地域と大学を繋ぐことを目指す団体「同志社大学 地域連携学生スタッフ ARCO（アルコ）」所属。



幼少期から人や建物の多さに息苦しさを感じ、東京での都市生活について疑問をいだく。快適な都市生活環境とは？を模索する中で「まちづくり」にたどり着き、興味をもつ。

上京の行事などに参加させていただき、お手伝いをしながら京都の「まちづくり」を学ぶ。

上京の外国人の方と地域の方々とのよりよい関係づくりを目指す「上京区の国際化を考える会」にて1年間活動。